

一般国道9号（静岡・仁摩道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書6

鳴滝山鉛鉾山古道 御大師山古道

2017. 6

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

一般国道9号（静岡・仁摩道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書6

鳴滝山鉛鉾山古道 御大師山古道

2017. 6

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

序

現在、一般国道9号の大田市静間町～仁摩町間については、急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が発生しやすい状況にあります。また一般国道9号の代替路線がなく、交通事故や災害等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしております。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動の支援を目的として、静間・仁摩道路を平成20年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、静間・仁摩道路建設地内にある遺跡について、島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は平成25年度に実施した大田市五十猛町地内に所在する鳴滝山鉛鋳山古道と御大師山古道の発掘調査成果をとりまとめたものです。今回の調査では近世に石見銀山へ鉛を供給していたことで知られる鳴滝山鉛鋳山への道と、山頂に祀られた弘法大師像への参道の調査を行い、貴重な資料を得ることができました。本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査および調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成29年6月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長 鈴木 祥弘

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて実施した一般国道9号（静間・仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の内、平成25年度に実施した鳴滝山鉛鋳山古道、御大師山古道の発掘調査成果をとりまとめたものです。

鳴滝山鉛鋳山古道と御大師山古道は、大田市五十猛町に所在します。鳴滝山鉛鋳山古道は、かつて石見銀山の銀精錬に必要な鉛を供給した鳴滝山鉛鋳山へ通じる道です。鳴滝山鉛鋳山は近世の文献に「磯竹鉛山」として記録されています。御大師山古道は、山の頂にある弘法大師座像を祀った岩窟へ参拝するための道です。今回の調査により、それぞれの道普請の様子やルートなどを明らかにすることができました。

本報告書がこの地域の歴史や文化を明らかにするための基礎資料として広く活用され、地域の文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、大田市教育委員会、五十猛まちづくりセンター、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成29年6月

島根県教育委員会

教育長 鴨 木 朗

例 言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成 25 年度に実施した一般国道 9 号（静間・仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。
2. 本書で報告する遺跡は次のとおりである。
なるたきやまなまりこうざんこどう・おたいしやまこどう
鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道（大田市五十猛町 2318-1 ほか）
3. 調査組織は次のとおりである。
調査主体 島根県教育委員会
平成 25 年度 現地調査
[事 務 局] 廣江耕史（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）
熱田貴保（管理課長）
[調査担当者] 今岡一三（調査第一課長）、是田 敦（同課企画員）、武田尚志（同課教諭兼文化財保護主任）、片寄雪美（同課臨時職員）
平成 28 年度 報告書作成
[事 務 局] 萩 雅人（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）
池淵俊一（管理課長）
[調査担当者] 林 健亮（調査第三課長）、是田 敦（同課調査第四係長）
4. 現地調査および整理事業において、以下の方々からご指導いただいた。（所属と役所は当時）
長嶺康典（大田市教育委員会教育部生涯学習課文化財係長）
5. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、掘削、測量等）については、島根県教育委員会から大畑建設株式会社に委託した。
6. 挿図中の北は、測量法による第Ⅲ平面直角座標系 X 軸方向を指し、座標系の XY 座標は世界測地系による。また、レベル高は海拔高を示す。
7. 本書第 2 図は、国土地理院発行の 1/25,000 地図を使用して作成したものである。
8. 本書に掲載した写真は是田が撮影した。
9. 本書の執筆と編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て是田が行った。
10. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 地理的環境と歴史的環境	3
第3章 調査の内容	7
第1節 調査の概要	7
第2節 トレンチ調査	11
第3節 小結	14
第4章 総括	14

挿図目次

第1図	本書所収遺跡の位置	1
第2図	鳴滝山鉛鉾山古道・御大師山古道と周辺の遺跡	4
第3図	鳴滝山鉛鉾山古道・御大師山古道の周辺地形図	8
第4図	鳴滝山鉛鉾山古道・御大師山古道平面図	9、10
第5図	トレンチ1実測図	11
第6図	トレンチ2実測図	11
第7図	トレンチ3実測図	12
第8図	トレンチ4実測図	12
第9図	トレンチ5実測図	13
第10図	トレンチ6実測図	13

表目次

第1表	鳴滝山鉛鉾山古道・御大師山古道と周辺の遺跡	5
-----	-----------------------	---

写真図版目次

図版1	鳴滝山・御大師山遠景(中央の山が鳴滝山・御大師山。西から撮影) 古道入り口 鳴滝山鉛鉾山古道と御大師山古道の分岐点
図版2	鳴滝山鉛鉾山古道(炭窯跡1) 鳴滝山鉛鉾山古道(炭窯跡2)
図版3	鳴滝山鉛鉾山古道(炭窯跡3) 鳴滝山鉛鉾山古道(トレンチ1とトレンチ2の間) 鳴滝山鉛鉾山古道(トレンチ3より東側の急勾配)
図版4	鳴滝山鉛鉾山古道(貯水場) 鳴滝山鉛鉾山古道(坑口①・②遠景) 鳴滝山鉛鉾山古道(上:坑口①・下:坑口②) 鳴滝山鉛鉾山古道(坑口③)
図版5	御大師山古道(鳴滝山鉛鉾山古道との分岐点付近) 御大師山古道(トレンチ6付近) 御大師山古道(貯水池へ向かう道との分岐点)
図版6	御大師山古道(分岐点左側の地藏像:正面) 御大師山古道(分岐点左側の地藏像:背面) 御大師山古道(分岐点左側の地藏像:台座)
図版7	御大師山古道(分岐点右側の地藏像:正面) 御大師山古道(分岐点右側の地藏像:背面) 御大師山古道(分岐点右側の地藏像:台座) 御大師山古道(分岐点からの登り口)
図版8	御大師山古道(岩窟手前) 御大師山古道(岩窟) 御大師山古道(岩窟内部)

- 図版 9 御大師山古道 (岩窟内の弘法大師座像)
御大師山古道 (山頂から南西側を撮影)
- 図版 10 トレンチ 1 東壁
トレンチ 2 西壁
- 図版 11 トレンチ 3 東壁
トレンチ 4 南壁
- 図版 12 トレンチ 5 南壁
トレンチ 5 南壁

第1章 調査に至る経緯と経過

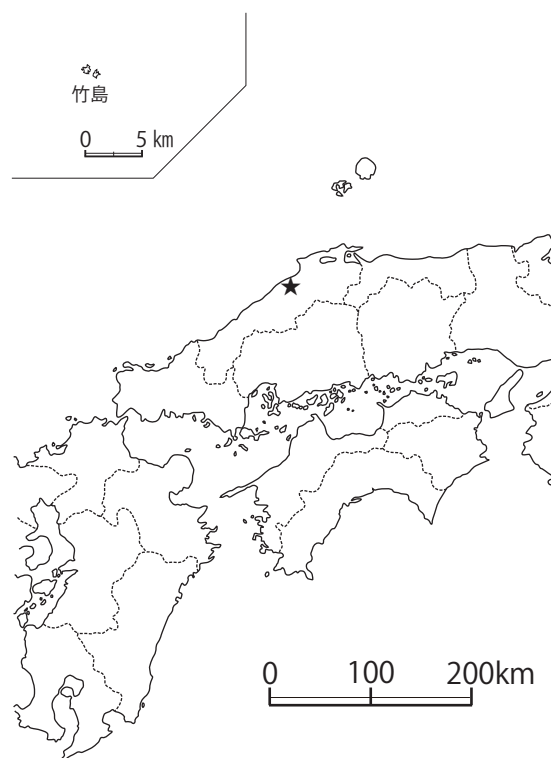
一般国道9号は京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約750kmで、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。この内、静間～仁摩間の現道は急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が発生しやすい状況にある。また、この区間では、国際規格コンテナ通行支障トンネルや、事故・災害発生時の通行止めが発生し、大幅な迂回が必要となるなど、社会経済活動に大きな支障をきたしている。こうした問題を解決するため、島根県大田市静間町から大田市仁摩町大國に至る延長7.9kmを結ぶ自動車専用道路が計画され、平成20(2008)年度から「静間・仁摩道路」として事業着手されている。

この計画に先立ち、国土交通省から島根県教育委員会に対して計画地内の埋蔵文化財についての照会があり、平成16(2004)年度と平成17(2005)年度に最初の分布調査を実施した。その後、平成18(2006)年2月、平成22(2010)年2月にも分布調査を実施した。島根県教育委員会では、平成22年5月25日付け島教文財第233号で、本線予定地内に所在する8遺跡と4カ所の要注意箇所を回答している。平成23(2011)年度末には工所用道路の分布調査を行い、これについては、平成24年4月9日付け島教文財第49号で回答した。

これらの結果を受けて、国土交通省と島根県教育委員会の間で、予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われ、平成25年3月26日付け国中整松一官第248号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が国土交通省から文化庁長官あてに提出された。それに対し、平成25年3月26日付け島教文財第11号の62で、島根県教育委員会教育長から10遺跡について記録作成のための発掘調査の実施が勧告された。

この間の平成21(2009)年5月には、静間・仁摩道路の計画線に近い大田市五十猛町所在の鳴滝山鉛鉱山跡について、世界遺産である石見銀山の操業に関わる鉛鉱山である可能性があることから、同年7月に現地協議を行った。平成23(2011)年3月に再度分布調査を行った結果、坑道本体は事業地内に含まれないことを確認したが、鳴滝山鉛鉱山古道及びそこから枝分かれする御大師山古道が事業地内に含まれることが判明したため、平成25年8月19日付け国中整松調設第50号で文化財保護法第94条第1項の通知が提出され、平成25年8月20日付け島教文財第15の35で発掘調査の実施が勧告された。

静間・仁摩道路と仁摩温泉津道路の接点で仁摩・石見銀山インターチェンジに隣接する大田市仁摩町大國地内には庵寺石塔と呼ばれる岩窟があり、宝篋印塔などが納められている。この遺跡は、平成14(2002)年3月の分布調査で確認されていたが、平成15(2003)年7月に仁摩温泉津道路に関して島根県教育委員会教育長から国土交通省へ回答した際には、仁摩温泉津道路建設



第1図 本書所収遺跡の位置

予定地内には含まれていないと認識されていた。その後、平成 19（2007）年 7 月には『石見銀山遺跡とその文化的景観』が世界遺産に登録されると、この付近は世界遺産のバッファゾーンとなった。岩窟内に安置される宝篋印塔は、元禄 2（1689）年銘がある福光石製石塔で、保存状態がよく、紀年銘があることから石見銀山にある同型式の石塔類研究の基準資料となる貴重なものとされた。この石塔と周囲の遺跡の保存について、平成 22（2010）年 10 月の取り扱い協議で、「静間・仁摩道路」の事業地内に含まれることが判明したため、島根県教育委員会から国土交通省に対し重要性を説明し、同月、大田市石見銀山課が国土交通省に対し、「石見銀山景観保全条例」との調整について協議を行った。それを受けて、国土交通省では工法変更により岩窟付近を保存することになったが、工事の影響を受ける岩窟前面のテラス部分については遺構の広がりを確認する必要が生じたため、平成 26（2014）年度に発掘調査を実施した。

静間・仁摩道路建設予定地内の試掘確認調査は、平成 24（2012）年度に古屋敷遺跡で実施し、平成 25（2013）年 10 月に大田市五十猛町地内で実施し、平成 26（2014）年 7 月から 12 月には大国地頭所遺跡など 6 カ所で実施し、平成 27（2015）年度は静間町及び仁摩町地内で 7 カ所実施した。その結果、垂水遺跡・松林寺遺跡・大国地頭所遺跡・庵寺石塔群（テラス部分）の発掘調査を実施することとなった。

平成 25（2013）年度には古屋敷遺跡（A・B 区）と鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道、平成 26（2014）年度には古屋敷遺跡（C・D・E・F 区）、平成 27（2015）年度には古屋敷遺跡（G・H・I 区）と大国地頭所遺跡、平成 28（2016）年度には松林寺遺跡の発掘調査を行った。なお、平成 25（2013）年度には、工事用道路に関連する大田市仁摩町宅野の城ノ内遺跡の発掘調査を行う予定であったが、工事の都合により延期された。この年の 6 月 10 日には、城ノ内遺跡周辺の石塔類について、立正大学文学部教授の池上悟氏、元島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏の調査指導を受けた。

鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道については、平成 25（2013）年 9 月 9 日から 10 月 19 日にかけて、古道の構造を調査するためのトレンチ調査と、古道及び周辺の地形測量を行った。トレンチは両古道に各々 3 箇所設定した。トレンチの掘削は 9 月 9 日から 9 月 11 日まで人力で実施した。掘削に並行してトレンチの測量、土層断面図の実測、写真撮影を 9 月 9 日から 9 月 13 日まで実施した。9 月 13 日に長嶺康典氏の調査指導を受けた。10 月 15 日から 10 月 19 日まで地形測量を業務委託で実施し、現地の調査を完了した。

調査にあたっては、幅 1m～2m、長さ 4m～8m のトレンチを古道を横断するように設定した。掘削は、主にスコップを用いて人力で掘り下げ、遺構検出などは草削り・移植ゴテで行った。

平面図は、遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正を行った。必要に応じて手測りで平面図を作成した。遺構の写真は、原則として 35mm 白黒フィルムカメラ、35mm デジタルカメラ、6×7 判フィルムカメラによる撮影を行った。

報告書作成は DTP 方式を採用し、遺構図面は平面図・断面図等をレイアウトした下図をデジタルトレースした。デジタルトレースや図の加工などは Adobe 社製 Illustrator CS5・Photoshop CS5 を用いた。遺構写真はデジタルカメラで撮影した後、Photoshop CS5 を用いてコントラスト調整し EPS データ化した。最終的な原稿執筆、編集作業は Adobe 社製 In Design CS5 を用いて行った。

第2章 地理的環境と歴史的環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

かつて石見国であった島根県西部は中国山地から北に伸びる丘陵が日本海に迫り、深い入り江となったりアス海岸と、その間に開けた平野や砂丘が交錯する変化に富んだ地形となっている。鳴滝山鉛鉍山古道と御大師山古道の所在する大田市五十猛町は、大田市海岸部のほぼ中央に位置し、南には、大田市大屋町を挟んで世界遺産『石見銀山遺跡とその文化的景観』の中心部である大田市大森町がある。五十猛町には3本の主要な河川があり、町のほぼ中央に野田川が、東端に小金川が、野田川と小金川の間で逢浜川が流れる。これら河川の流域や河口に小規模な平野部が見られるが、大半は山地である。鳴滝山鉛鉍山古道と御大師山古道は逢浜川の中流域に位置する。古道は逢浜川右岸に広がる小平野から発し、途中で分岐して、それぞれ鳴滝山鉛鉍山と弘法大師座像が祀られている岩窟へ向かう。古道の名称になっている御大師山と鳴滝山は一連の山である。山の尾根上には頂が3箇所あり、南側の頂は標高約140m、中央の頂は標高約129m、北東側の頂は標高約127mある。南西側の頂には弘法大師座像が祀られている岩窟があり、北東側の頂の北側山腹に鳴滝山鉛鉍山の坑道がある。

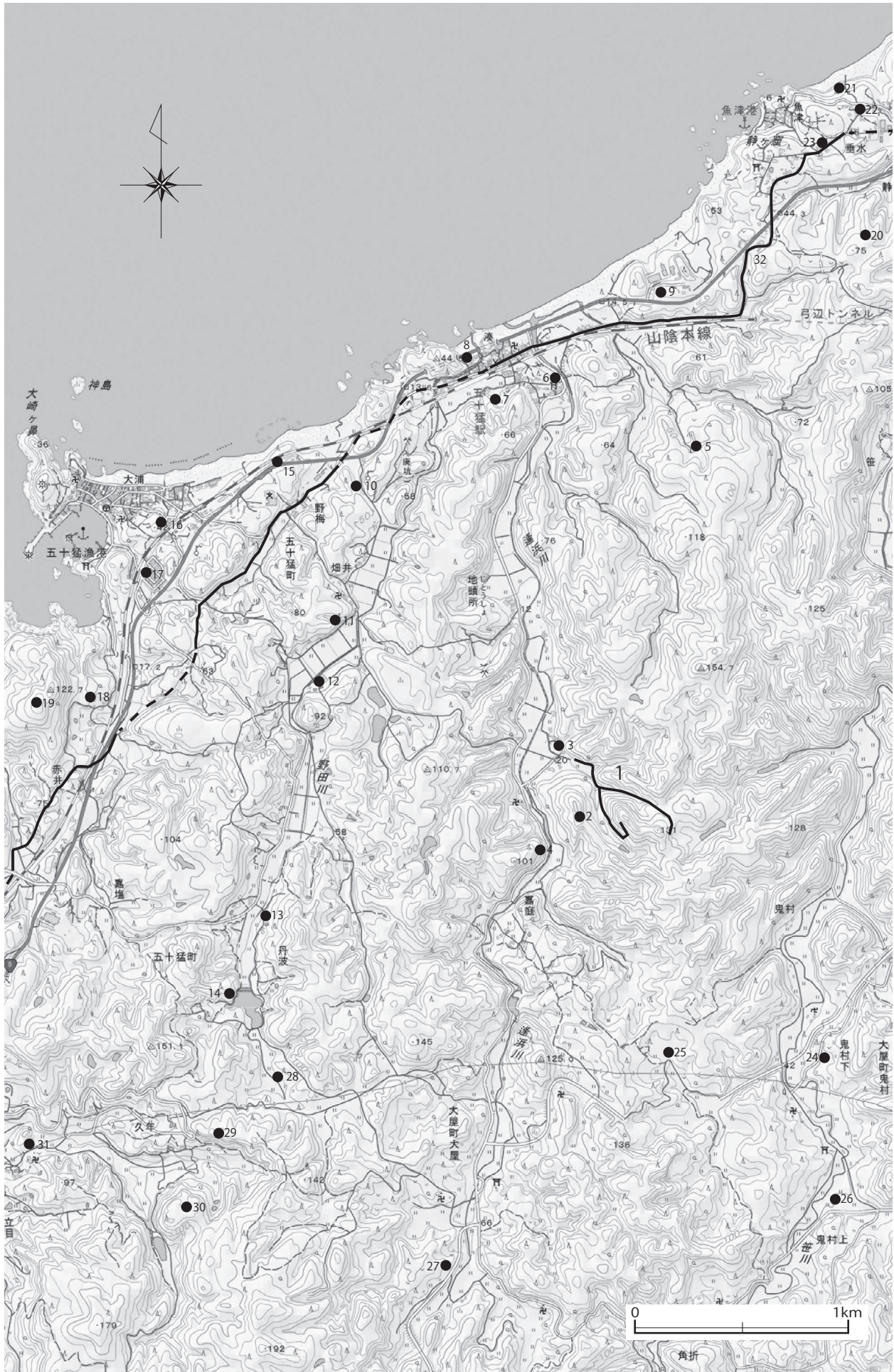
鳴滝山鉛鉍山は鉛の産出地として江戸時代の文献には磯竹鉛山として記載され、生野銀山の吹大工が派遣されている鉍山である。坑道は3箇所開口しており、坑口の谷側にはズリが堆積している。坑道の一つは垂直な崖面に幅1.2m、高さ2m以上で開口し、壁は垂直で、天井がわずかに湾曲する（坑口①）。坑道を約5m進むと2手に分かれ、左は下方に延び、右は崩落している。坑口①の下方に、もう一つの坑道が開口している（坑口②）。この坑道はほとんど埋まっており、幅0.6m、高さ0.5mしか開口していない。これらの坑口から約20m下方に3つ目の坑道が開口している（坑口③）。幅1.7m、高さ1.2mの方形で、木組みが残存している。これらの他にも埋没している坑口が数カ所以上あると考えられている。

御大師山古道がつづく南西側の頂付近は岩が露出している。頂のやや下方には岩窟が造られ、3体の弘法大師座像が祀られている。

2. 歴史的環境

旧石器・縄文時代 五十猛町では旧石器時代や縄文時代の遺跡は知られていない。隣接する大田市仁摩町では縄文時代前期の遺跡として、久根ヶ曾根遺跡、鳥居原遺跡、仁万大橋遺跡などがあり、中期以降の遺跡として古屋敷遺跡、川向遺跡、坂灘遺跡などがある。特に古屋敷遺跡は発掘調査で晩期の木棺墓、住居跡、水さらし場などが検出されており、県内屈指の縄文時代の遺跡として知られている。

弥生時代 五十猛町内では五十猛神社遺跡(6)で弥生土器が出土しているが、他に弥生時代の遺跡は確認されていない。仁摩町では古屋敷遺跡で多量の弥生時代前期の土器とともに複数の土坑が検出されているほか、五丁遺跡や庵寺遺跡でも、縄文晩期から弥生前期に流れていたと見られる自然流路が見られ、庵寺遺跡では34点の田下駄をはじめとする木製品が出土している。川向遺跡では円形に配された杭列遺構をはじめ、前・中期の土器・石器・木製品など多くの遺物が出土している。庵寺古墳群では、仁万平野を見下ろす丘陵に弥生時代後期の短期間に営まれた集落が発見され、いわゆる高地性集落として注目される。この他には楡ノ木遺跡、大寺遺跡、孫四田遺跡などがあり、弥生時代の遺跡は仁万平野周辺に集中している。



第2図 鳴滝山鉛鉾山古道・御大師山古道と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

古墳時代 古墳時代になると五十猛町内では遺跡が増加する。古墳 1 基、横穴墓 3 箇所が確認されており、これらの遺跡は海岸部に分布している。五十猛町赤井の穴ヶ迫古墳 (18) は、石見部で唯一の切石造りの横穴式石室を有する古墳として注目されている。墳丘は削られているが、羨道部の左壁と玄室が残っている。玄室は精美的な切石で構成されており、石棺式石室に近い石室で、海上交通を介した出雲地域などとの交流を伺わせる。五十猛町の近隣では、大田市静間町の垂水古墳 (23) や仁摩町の宝隆寺裏古墳群 (31) が知られている。垂水古墳は墳丘の盛土が流失しているが、残存する部分から直径 10m 前後の円墳と考えられている。宝隆寺裏古墳群は内陸部に位置する古墳群で、11 基の古墳から構成され、須恵器や鉄刀が出土している。五十猛町内の横穴墓は、湊横穴 (7)、楠石横穴群 (8)、野梅横穴 (10) が知られている。このうち楠石横穴群では玄室内から人骨が出土している。人骨は身長等は不明であるが、成人男性 1 名と推定されている。その他に須恵器の坏蓋 3 点、鉄鏃 2 点、刀子 1 点が出土している。近隣では静間町に近藤浜横穴群 (21) がある。近藤浜横穴群は海岸沿いにある横穴墓群で、横穴墓 7 基が確認されている。五十猛町内の古墳や横穴墓以外の遺跡としては、湊東遺跡 (9)、畑井遺跡 (11)、畑井南遺跡 (12)、五十猛小学校遺跡 (15)、明神遺跡 (17) が散布地として知られている。近隣では静間町の静間城跡で古墳時代後期の竪穴建物や加工段が検出され、静間城跡の麓にある平ノ前遺跡では古墳時代前期と後期の竪穴建物や旧静間川から水田に引水する灌漑用水路と考えられる溝状遺構が検出されている。この溝状遺構からは古墳時代中期から後期の遺物が大量に出土し、出土品には赤彩土器、ミニチュア土器、勾玉、白玉、金銅製歩揺付空玉などが含まれており、水辺の祭祀遺構として注目されている。その他に静間町の近藤平遺跡 (22) や、大屋町の鬼村 B 遺跡 (26) で須恵器が採集されている。

古代 五十猛町付近は、『和名類從抄』では安濃郡静間郷に含まれると考えられている。また、『延喜式』に見える石見国には波祢、詫濃、楠道、江東、江西、伊甘の 6 驛家があったとされている。古代山陰道の位置は判明していないが、託農驛家が現在の大田市仁摩町宅野付近であれば、比較的近くを山陰道が通っていた可能性がある。五十猛町の古代の遺跡は明らかでないが、静間町の垂水遺跡 (20) では奈良時代から平安時代の土師器や須恵器が出土し、平ノ前遺跡では古墳時代終末期から古代の大型掘立柱建物跡や溝跡等が検出されている。大田市温泉津町の中祖遺跡では瓦葺きの古代の建物跡が発見され、大田市水上町の白坏遺跡からは「延喜九 (909) 年」と記された木簡が出土し末端官衙の可能性が指摘されている。また、近隣の仁摩町大国にある五丁遺跡で条里制の畦畔が検出されている。

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道	12	畑井南遺跡	23	垂水古墳
2	地頭所城跡	13	五十猛金クソ遺跡	24	鬼村遺跡
3	五十猛鉾山遺跡	14	五十猛金クソ遺跡	25	鬼村 A 遺跡
4	嘉庭遺跡	15	五十猛小学校遺跡	26	鬼村 B 遺跡
5	小金川 B 遺跡	16	泊山城跡	27	大屋金床跡
6	五十猛神社遺跡	17	明神遺跡	28	平山遺跡
7	湊横穴	18	穴ヶ迫古墳	29	城乃内遺跡
8	楠石横穴群	19	唐郷山城跡	30	宅野城跡
9	湊東遺跡	20	垂水遺跡	31	宝隆寺裏古墳群
10	野梅横穴	21	近藤浜横穴群	32	近世山陰道
11	畑井遺跡	22	近藤平遺跡		

第 1 表 鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道と周辺の遺跡

中世・近世 大永6（1526）年、石見銀山が再発見され、銀鉱山開発が活発化すると、大田市域は戦国大名の争奪の場となる。五十猛町においては、地頭所城跡（2）、泊山城跡（16）、唐郷山城跡（19）の3箇所の城跡が知られている。このうち地頭所城跡は鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道の南側の山に築かれており、尾根づたいに郭が階段状に築かれ、背後の尾根を断ち切るかたちで堀切を設け、山腹の平坦面には石組の井戸跡などがある。五十猛町周辺では仁摩町の宅野城跡（30）や、静間町の静間城跡が知られている。静間城跡では、礎石建物跡や掘立柱建物跡が検出されている。城跡以外には、五輪塔が確認されている嘉庭遺跡（4）や、スラグが採集され製鉄遺跡と考えられる五十猛鉦山遺跡（3）、五十猛金クソ遺跡（13・14）がある。五十猛町周辺では、大屋町の平山遺跡（28）や仁摩町の城乃内遺跡（29）で法篋印塔が確認され、大屋町の鬼村A遺跡（25）や大屋金床跡（27）でスラグが採集されている。また、近世山陰道は海岸部を静間町から宅野町に向かって通る。

〈参考文献〉

- 『大田市誌』大田市 1968年
- 『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅷ集 島根県教育委員会 1981年
- 『島根県大百科事典』上巻 島根県大百科事典編集委員会・山陰中央新報社 1982年
- 『三瓶川流域遺跡他詳細分布調査Ⅱ』大田市教育委員会 1984年
- 『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ 石見部製鉄遺跡』島根県教育委員会 1984年
- 『角川日本地名大辞典32 島根県』角川書店 1991年
- 『日本歴史地名体系第33巻 島根県の地名』平凡社 1995年
- 『歴史の道調査報告書 山陰道Ⅱ』島根県教育委員会 1996年
- 『島根県中近世城館分布調査報告書〈第1集〉石見の城館』島根県教育委員会 1997年
- 『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』島根県教育委員会 2002年
- 『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』1 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2011
- 『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報』25 島根県教育委員会 2017年
- 『古屋敷遺跡（A・E区）』島根県教育委員会 2017年
- 『古屋敷遺跡（D区）』島根県教育委員会 2017年
- 『古屋敷遺跡（C・F・H・I区）』島根県教育委員会 2017年

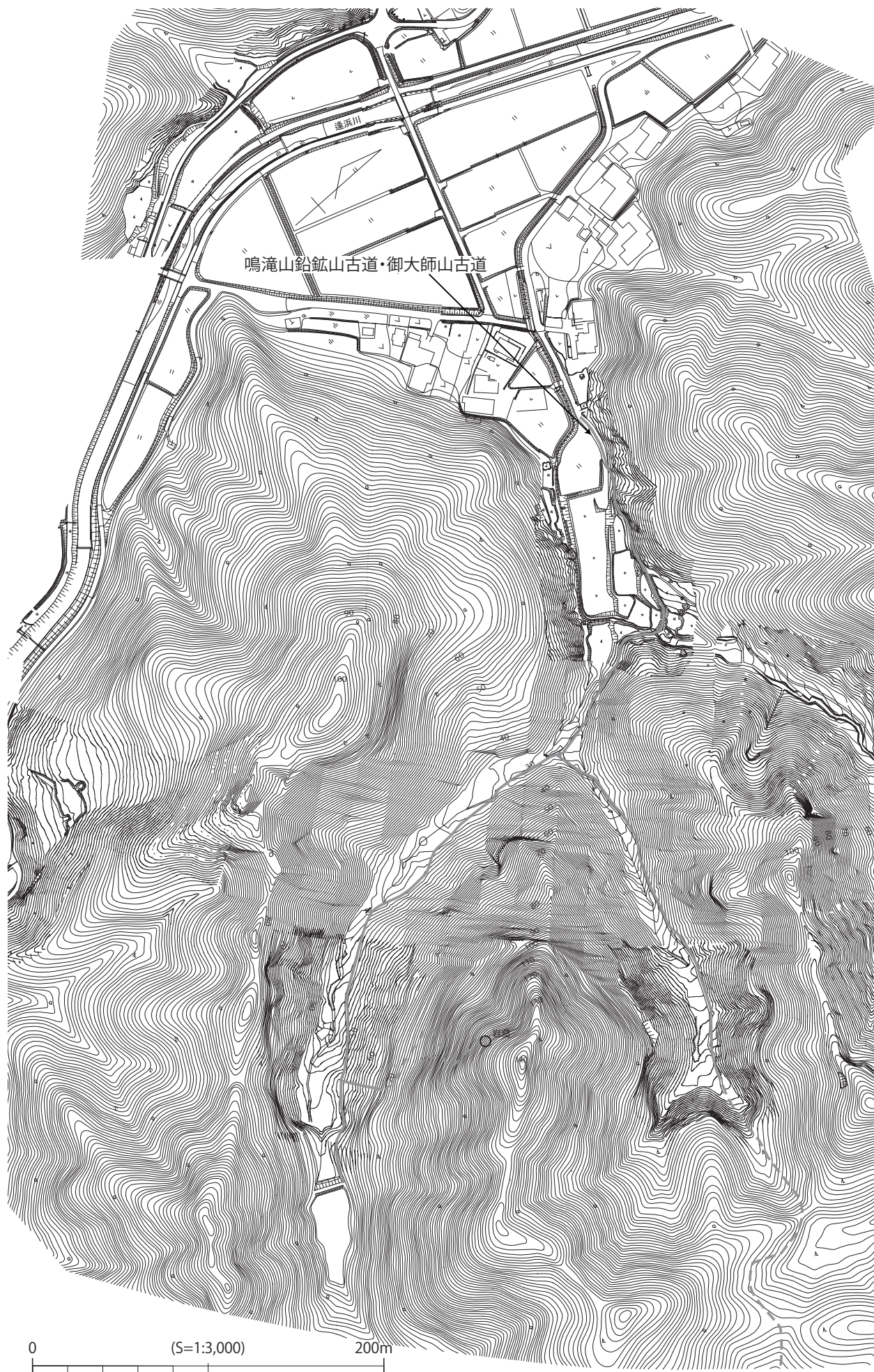
第3章 調査の内容

第1節 調査の概要

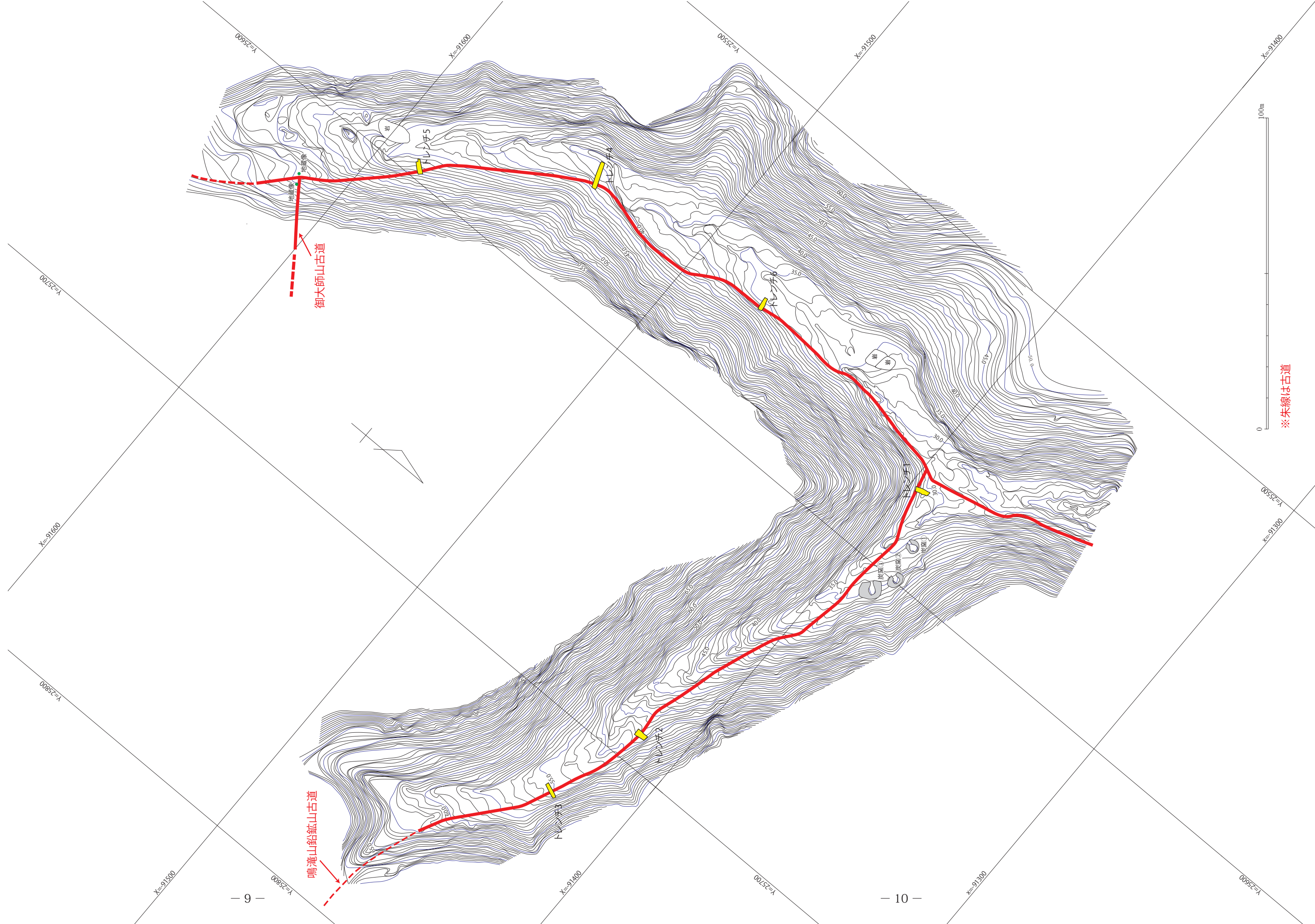
鳴滝山鉛鉱山古道と御大師山古道は、逢浜川の中流域に位置する。逢浜川は大屋町を発し、五十猛町を通過して日本海に流れる。両古道は逢浜川右岸に広がる小平野から、東側の山地に向かう道で、途中で鳴滝山鉛鉱山へ向かう鳴滝山鉛鉱山古道と、弘法大師座像が祀られている岩窟に向かう御大師山古道に分岐する。両古道は平野部から谷筋に沿ってY字状の分岐点まで進む。調査前には分岐点に高さが50cm～70cm程度の石製の地蔵像が置かれていたが、調査時には撤去されていた。道幅は現状で約0.5m～1mあり、長さは谷の入り口から分岐点まで水平距離で約500mある。道は最初は谷底よりやや高い場所を通り、やがて谷底付近を通過して分岐点に至る。分岐点では急峻な尾根が張り出し、東側と南側の2方向の谷筋に分かれる。

鳴滝山鉛鉱山古道は東側の谷筋に沿って延びる。道幅は現状で約0.4m～3mで、分岐点から鳴滝山鉛鉱山の坑口付近まで水平距離で約500mある。道は最初は谷底付近を通り、やがて谷底よりやや高い場所を通過して、途中で急峻な斜面を登り、山の中腹に至る。山の中腹からは比較的平坦な道を進んで坑口に至る。山の中腹から坑口までには貯水場の跡が1箇所ある。開口した坑口は3箇所ある。最高所の坑口①は幅1.2m、高さ2m以上あり、奥に約5m進むと二手に分かれる。坑口①の直下に半ば埋もれた状態の坑口②が幅60cm、高さ50cmで開口している。これらの坑口よりやや下がった場所に、幅1.7m、高さ1.2mの坑口③がある。坑口③は方形で、木組みが残存している。内部が崩落しており、3m程度が残存する。また、御大師山古道との分岐点付近では山側に3基の炭窯(炭窯①～③)が築造されている。3基とも平面形は円形で、内側の直径で2.3m～2.5mあり、道に向かって開口している。あまり埋没していないことから近現代の炭窯と考えられる。

御大師山古道は南側の谷筋に沿って延びる。途中で岩窟に向かう道と、貯水池に向かう道に分岐する。鳴滝山鉛鉱山古道との分岐点から貯水池との分岐点までは、道幅が現状で幅0.4m～2mで、距離は水平距離で約250mある。分岐点には石製の地蔵像が山に登る者に対して正面になるよう北西を正面にして道の両側に2体安置されている。山側の地蔵像は高さ約70cmで、地蔵像の右手が岩窟に進む方向を指している。台座の正面には「□□」「同行」「五人」と3行線刻されている。谷側の地蔵像も高さ約70cmで、光背に陽刻された右手が岩窟に進む方向を指している。台座の正面には「施主 林□□」と線刻されている。岩窟に向かう道は山側に直角に折れる。最初は急峻な斜面を直線的に登り、途中からつづら折りに進み岩窟に至る。貯水池との分岐点から岩窟まで、道幅は現状で幅0.5mで、距離は水平距離で約130mある。一方、分岐点から貯水池までは、道幅は現状で2mで、距離は水平距離で約70mある。岩山を掘削して造られた祠は、高さ約1.9m、幅約2.0mで、内部に段が2つある。上段には3体の弘法大師座像が安置されている。中央には彩色された高さ約36cmの石膏製と考えられる弘法大師座像が格子扉の箱の中に安置され、両側に彩色されていない高さ33cmの石製弘法大師座像が安置されている。今回の調査では、工事区域となる鳴滝山鉛鉱山古道と御大師山古道の分岐点付近から、鳴滝山鉛鉱山古道については急斜面を登る手前まで、御大師山古道については貯水池との分岐点までを調査範囲とし、両古道と周辺の地形測量とトレンチ調査を実施した。なお、トレンチ調査で遺物は検出できなかった。



第3図 鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道の周辺地形図 (S=1/3,000)

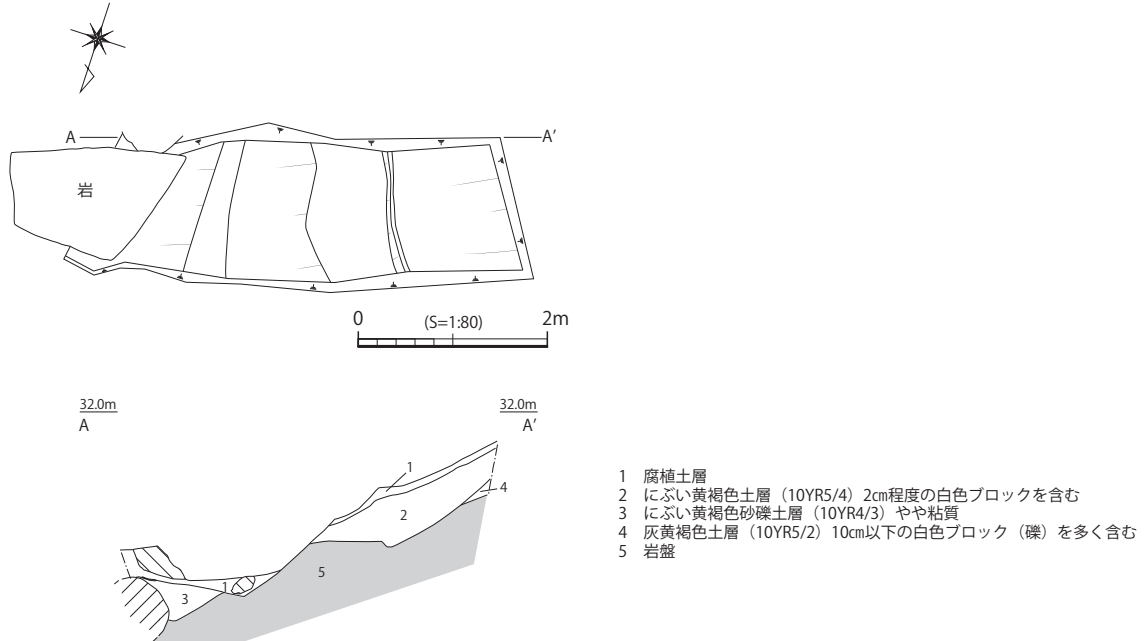


第4図 鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道平面図 (S=1,000)

第2節 トレンチ調査

トレンチ1

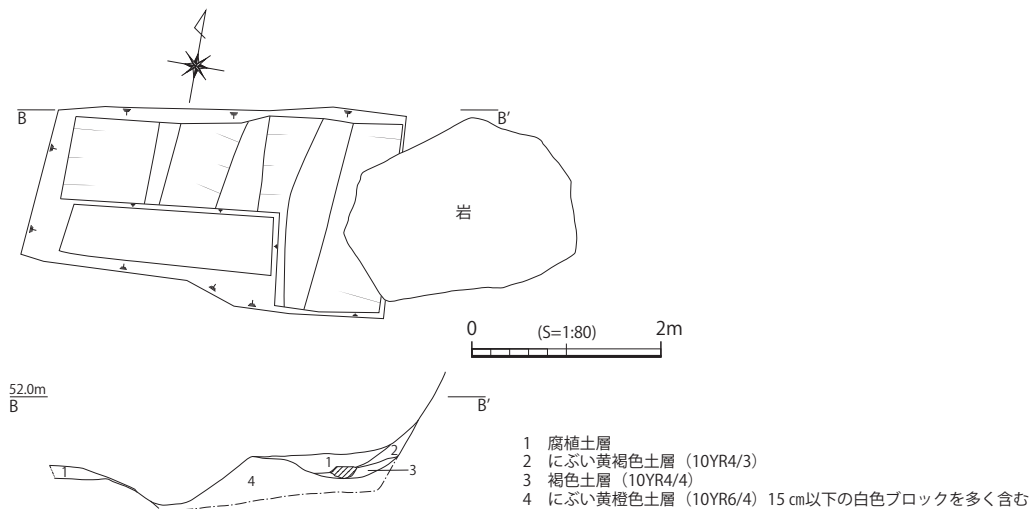
鳴滝山鉛鉱山古道に設置したトレンチで、御大師山古道との分岐点付近に設定した。現状では逆台形状に掘削された道で、道幅は上端で180cm、底面で90cmを測る。当初は西側（山側）の岩盤を掘削して路面を造成していたと考えられ、道幅は2.7m前後あったと考えられる。側溝は検出できなかった。谷底に近い場所のため、崩落などで山側が埋没する一方で、谷側は流水などで削られ、現在の形状になったと考えられる。



第5図 トレンチ1実測図 (S=1/80)

トレンチ2

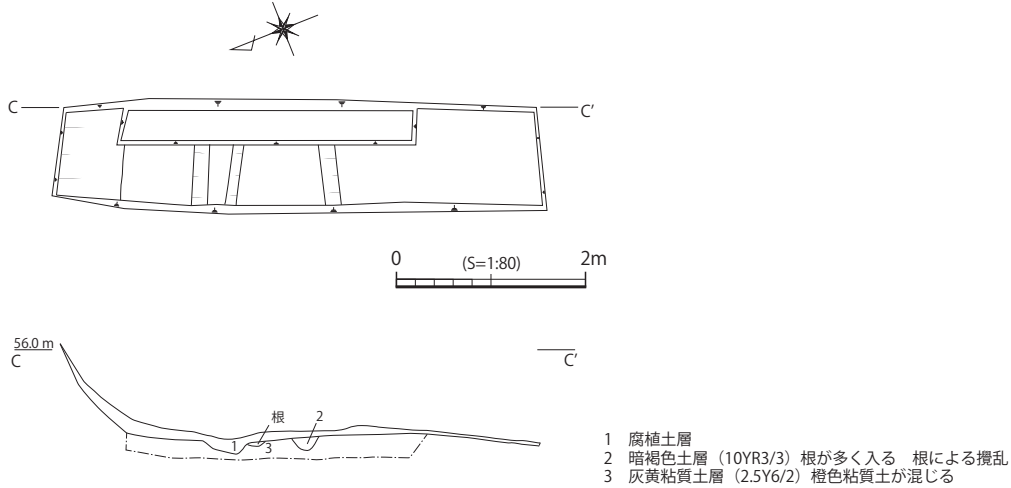
鳴滝山鉛鉱山古道に設置したトレンチで、やや急な斜面を登り緩やかになった場所に設定した。現状では逆台形状に掘削された道で、道幅は上端で160cm、底面で40cmを測る。当初は山側を掘削して路面を造成している。東側（山側）で幅120cm、深さ30cmの溝状遺構を検出した。側溝の可能性と、道であった可能性が考えられる。現在の道で西側が失われており、当初の道幅は不明である。



第6図 トレンチ2実測図 (S=1/80)

トレンチ 3

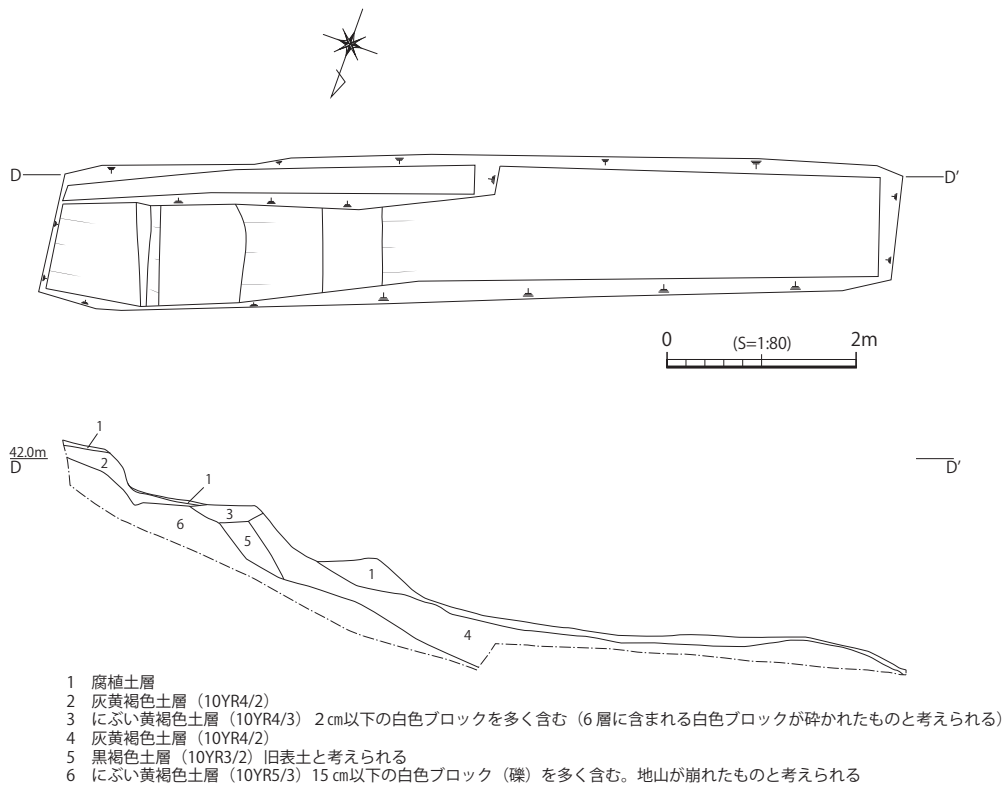
鳴滝山鉛鉱山古道に設置したトレンチで、急斜面に登る前の緩やかな谷頭付近に設定した。平坦な道で、道幅は 240cm を測る。路面の中央に窪んだ箇所があるが山際との間が 80cm ほどしかなく側溝とは考え難い。平坦地の上、南側（谷側）に側溝などの痕跡がないため、当初の道幅は不明である。



第 7 図 トレンチ 3 実測図 (S=1/80)

トレンチ 4

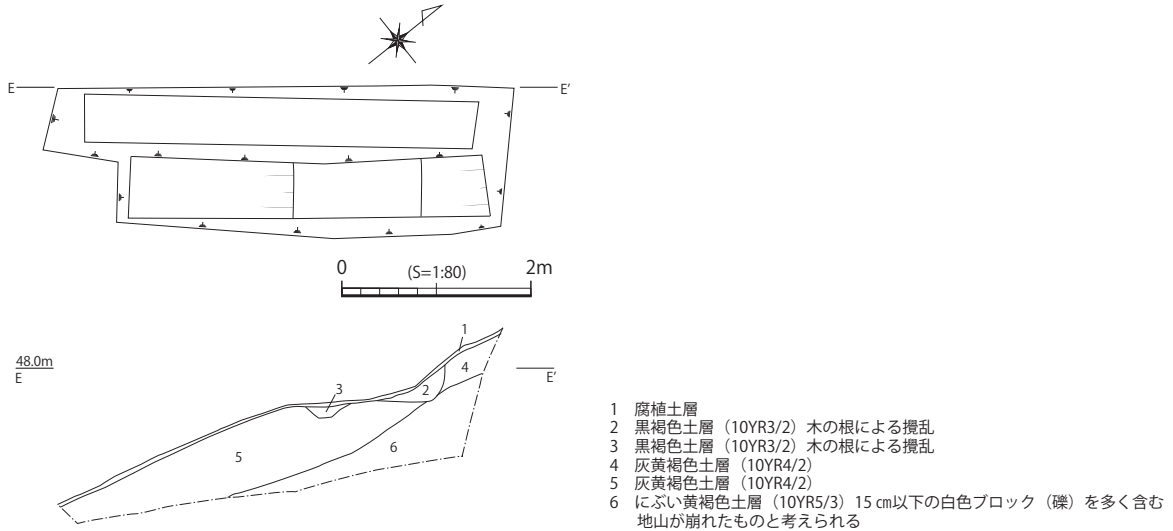
御大師山古道に設置したトレンチで、谷が急斜面から緩斜面に変化する付近に設定した。現状の道幅は約 120cm である。地山崩落土の上に造成された道で、当初は東側（山側）に幅 12cm、深さ 5cm の側溝が掘削されていた。山側斜面の掘削土を谷側に盛り路面を造成している。西側（谷側）は、ある程度崩落していると考えられ、当初の道幅は不明である。



第 8 図 トレンチ 4 実測図 (S=1/80)

トレンチ 5

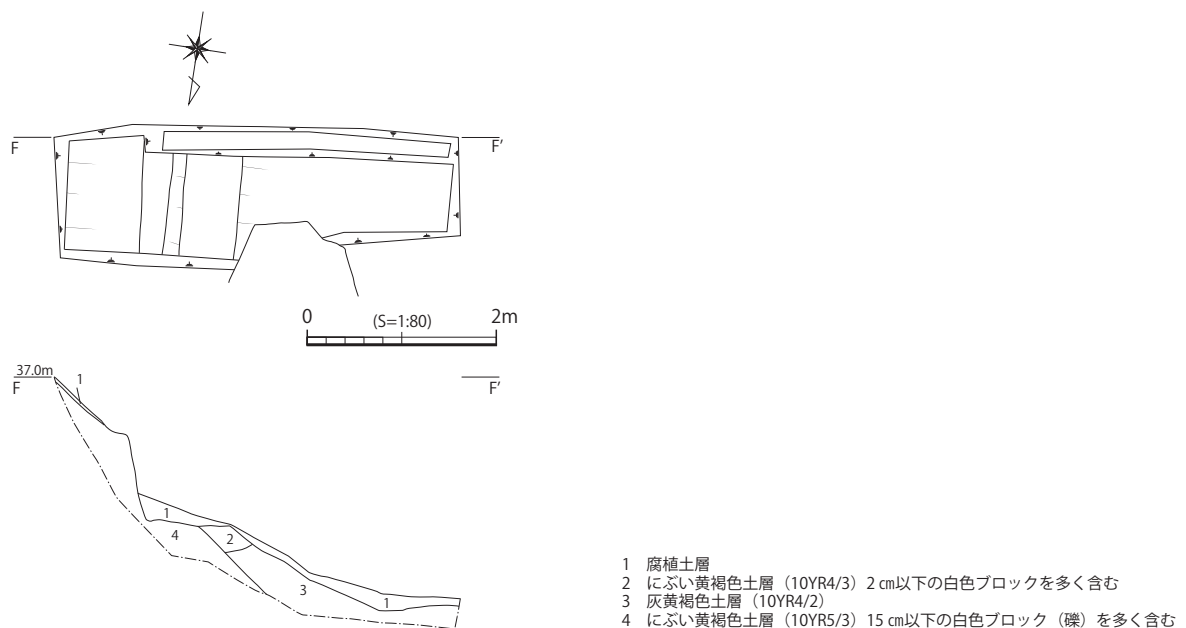
御大師山古道に設置したトレンチで、貯水池との分岐点の手前に設定した。現状の道幅は約 90 cm である。地山崩落土の上に造成されている。東側（山側）は木根により攪乱され、側溝は確認できなかった。当初の路面が攪乱部分まであったとすると、道幅は 150cm（5 尺）以上となる。またトレンチ 4 で見られたような盛土は確認できなかった。



第 9 図 トレンチ 5 実測図 (S=1/80)

トレンチ 6

御大師山古道に設置したトレンチで、鳴滝山鉛鉱山との分岐点とトレンチ 4 の中間に設定した。道は急斜面と緩斜面の変換点付近を通っており、現状の道幅は約 90cm である。地山崩落土の上に造成された道で、当初は東側（山側）に幅 12cm、深さ 5cm の側溝が掘削されていた。山側斜面の掘削土を谷側に盛り路面を造成している。トレンチ 4 で確認した構造と同様である。西側（谷側）は、ある程度崩落していると考えられ、当初の道幅は不明である。



第 10 図 トレンチ 6 実測図 (S=1/80)

第3節 小結

1 鳴滝山鉛鉱山古道

鳴滝山鉛鉱山古道は、平野部から谷に沿って入り、途中で御大師山古道と分岐する。分岐点には地藏像が祀られていた。鳴滝山鉛鉱山古道は東側の谷沿いに進み、急斜面を登って山腹に出て、山腹沿いに緩やかな道を通って坑口に至る。谷の入り口から坑口まで水平距離で全長約1kmの道である。今回は、分岐点の手前から、急斜面に登る手前までの500mを調査した。この区間は谷底よりやや高い位置に、山側の斜面を削って道を造成している。削った土は谷側に盛った可能性はあるが、発掘調査では確認できなかった。また道路遺構で設置されることが多い排水用の側溝を明確な形で確認することができなかった。側溝は設置されていなかった可能性が高い。出土遺物はなく、築造年代は不明である。

2 御大師山古道

御大師山古道は、鳴滝山鉛鉱山古道と分岐したのち、南側の谷沿いに進み、谷頭で貯水池へ向かう道と分岐する。分岐点には地藏像が2体祀られており、弘法大師座像が祀られている岩窟へ向かう道を彫刻で示している。道は最初に急斜面を登り、次に山腹をつづら折りに登って、岩窟へ至る。一方、貯水池へは道を約70m直進すると到着する。この道の途中にも地藏像が一箇所置かれている。今回の調査は、鳴滝山鉛鉱山古道との分岐点から、貯水池に向かう道との分岐点付近までの250mを対象とした。この区間は、谷底よりやや高い位置にある急斜面と緩斜面の変換点に道が造られている。鳴滝山鉛鉱山古道との分岐点を過ぎた辺りからトレンチ5手前までの斜面の傾斜が強い区間は、山側の斜面を削り谷側に掘削土を盛って路面を造成している。トレンチ5付近から貯水池との分岐点までの傾斜が緩やかな場所は谷側に盛り土を行っているか不明である。また山側には排水用の側溝を設けており、鳴滝山鉛鉱山古道より複雑な構造の道路である。出土遺物はなく、築造年代は不明である。

第4章 総括

鳴滝山鉛鉱山古道は、近世に石見銀山の銀精錬に必要な鉛を供給した鉱山として知られる鳴滝山鉛鉱山に逢浜川方面から通じる道で、鉛鉱山の運営に関連したと考えられる道である。同じく近世の道路遺跡として近隣に梨ノ木坂遺跡がある。梨ノ木坂遺跡は石見銀山街道温泉津沖泊道から分岐する道路遺跡で、発掘調査で側溝、石畳、切り通しなどの道普請が確認された。鳴滝山鉛鉱山古道ではこのような道普請はなく、簡易な構造となっている。このことから鳴滝山鉛鉱山古道は鉛を搬出した道ではなく作業員の往き来などに利用された道で、鉛は南東側の尾根に沿って大田市大屋町鬼村方面へ搬出されたという意見がある。ただし現状では鳴滝山鉛鉱山から大屋町鬼村方面へ向かう鉛の搬出路と考えられる道は確認されていない。

御大師山古道は山頂西側のやや下方にある弘法大師座像を祀った岩窟に参拝する道である。かつては地藏像を岩窟へ運ぶ祀りが行われていた。弘法大師信仰を示す道である。

写真図版



鳴滝山・御大師山遠景（中央の山が鳴滝山・御大師山。西から撮影）



古道入り口



鳴滝山鉛鉋山古道と御大師山古道の分岐点



鳴滝山鉛鉦山古道（炭窯跡 1）



鳴滝山鉛鉦山古道（炭窯跡 2）



鳴滝山鉛鉱山古道（炭窯跡 3）



鳴滝山鉛鉱山古道（トレンチ 1 とトレンチ 2 の間）



鳴滝山鉛鉱山古道（トレンチ 3 より東側の急勾配）

図版 4



鳴滝山鉛鉞山古道（貯水場）



鳴滝山鉛鉞山古道（坑口①・②遠景）



鳴滝山鉛鉞山古道（上：坑口①・下：坑口②）



鳴滝山鉛鉞山古道（坑口③）



御大師山古道（鳴滝山鉛鉱山古道との分岐点付近）



御大師山古道（トレンチ 6 付近）



御大師山古道（貯水池へ向かう道との分岐点）

図版 6



御大師山古道（分岐点左側の地藏像：正面）



御大師山古道（分岐点左側の地藏像：背面）



御大師山古道（分岐点左側の地藏像：台座）



御大師山古道（分岐点右側の地藏像：正面）



御大師山古道（分岐点右側の地藏像：背面）



御大師山古道（分岐点右側の地藏像：台座）



御大師山古道（分岐点からの登り口）



御大師山古道（岩窟手前）



御大師山古道（岩窟）



御大師山古道（岩窟内部）



御大師山古道（岩窟内の弘法大師座像）



御大師山古道（山頂から南西側を撮影）



トレンチ1 東壁



トレンチ2 西壁



トレンチ 3 東壁



トレンチ 4 南壁



トレンチ5 南壁



トレンチ5 南壁

報告書抄録

ふりがな	なるたきやまなまりこうざんこどう・おたいしやまこどう							
書名	鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道							
シリーズ名	一般国道9号(静間・仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6							
編著者名	是田 敦							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター							
	http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/							
	E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp							
所在地	〒 690-0131 島根県松江市打出町 33 番地							
発行年月日	2017(平成29)年6月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
なるたきやまなまりこうざんこどう・ 鳴滝山鉛鉱山古道・ おたいしやまこどう 御大師山古道	しまねけん おおだし 島根県 大田市 いそたけちょう 五十猛町	32205	A 389	35° 10' 33"	132° 26' 52"	20130909 ~ 20131019	5,650㎡	道路建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道	道路	近世	道路	なし	中近世の古道			
要約	鳴滝山鉛鉱山で産出した鉛は近世には石見銀山の銀精錬に使用されており、鳴滝山鉛鉱山古道は鉛鉱山の経営に関わった道である。また、御大師山古道は山頂に祀られた弘法大師座像へ参拝するために必要な道として利用された。							

(緯度・経度は世界測地系による)

一般国道9号（静岡・仁摩道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書6

鳴滝山鉛鉱山古道・御大師山古道

発行 2017（平成29）年6月
発行者 国土交通省中国地方整備局松江国道事務所
鳥根県教育委員会
編集 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131 鳥根県松江市打出町33番地
電話 0852-36-8608
<http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/>
印刷 有限会社 高浜印刷

